

戦前期『生活学校』に見る後期生活主義教育論争

The Latter Half of the Argument over Life-principled Education in the Magazine 'Seikatsu Gakko' before 1945

鈴木 彩子

Saeko SUZUKI

1、はじめに

滑川道夫は、その著書『生活教育の建設』のなかで、「生活教育は生活のための教育である」「生活教育は生活による教育である」「生活教育は生活そのものの教育である」¹と述べる。「生活による」教育なのか、「生活そのもの」に教育的価値を見るのかについては、戦前よりしばしば議論となるところであるが、滑川の生活主義教育思想はそのどちらをも包括するものである。また、滑川は、国分一太郎、倉沢栄吉との鼎談の中で「ぼくは生活の言語を問題にしている。生活のなかの言語教育という発想と、言語生活を発想するのと、ぼくはちょっと違うんじゃないかと思うんだ」²と発言している。子どもの生活を問題にした教育は、戦前より「生活教育」や「生活主義教育」という言葉が混合して用いられ、また、戦後国語科においては西尾実の『国語教育学の構想』³に代表されるように「言語生活主義」という言葉で語られたりもする。「生活主義教育思想」⁴をテーマとする本研究は、言語生活の教育ではなく、生活主義の言語教育といった視点から国語教育史を紐解きたいという目的を持つものである。従って、本研究においては「生活主義教育」を定義づけるに当たり、滑川が求めたような広い意味での教育を生活主義教育と呼ぶものとする。これまで、戦前におけるその萌芽から、戦後にかけての流れを追ってきた。戦前に関しては、1923年に発足した教育の世紀社によって作られた池袋児童の村小学校における野村芳兵衛を中心とした教育、および池袋児童の村小学校機関紙として誕生した『生活学校』を中心として考察を進めてきた。『生活学校』は1936年7月の児童の村廃校の後も発刊を続け、レベルの高い論争の場となったが、1938年8月で休刊となり、その後『生活学校』同人への弾圧も起こる。そして、戦後には1946年10月に、波多野完治らによって『生活学校』は再刊の運びとなる。『生活学校』は、戦後においても滑川道夫らを中心として、生活主義的教育文化誌として、1950年6月号の最終号まで大きな役割を果たした。

本論考では、戦前における『生活学校』の流れを追った上で、1936年7月に池袋児童の村小学校が廃校となった後、戸塚廉が編集長として新たなスタートを切った第2期『生活学校』周辺に起こった生活主義教育論争を考察する。

2、雑誌『生活学校』 戦前の流れ

雑誌『生活学校』は、池袋児童の村小学校を母体として「児童の村生活教育研究会」によって1935年1月に創刊される。学校創設から10年余りの月日が経過している。開校からそれまでの池袋児童の村小学校は、土井竹治や鷲尾知治が児童の村を去り、新しい学校を作るなど、内部分裂が繰り返されていた。『生活学校』創刊に向けて1934年1月より相談が始まり、夏には具体的な計画が進められるが、計画者の1人である牧沢伊平が秋に学校を去るなど紆余曲折が続いた。また、この頃、野村と共に児童の村小学校の中心的人物であり、児童の村小学校廃校の後に『生活学校』の編集長を任される戸塚廉（1907年生まれ）も野村への不満を募らせていた。戸塚は野村学級の子どもたちは優秀ではあるが「工場街の子どもたち」のような「厳しい生活と労働の中で育った、強じんな土性骨のようなもの」が感じられないとし、以下のように児童の村小学校そのもののあり方や保護者の考え方を否定している。

（略）不当な支配に抵抗する力量が、他ならぬその支配されている公立学校で、複雑多様な生活経験をもち、直接に社会的労働に精神の裏打ちをされた父母をもった児童大衆の集団の中でこそ作られることを見ず、「児童の村」のような、少数の子どもを進歩的な教師がとりかこみ、権力の直接支配の及ばないところにほんとうの教育があるとする甘さにおちいていた⁵

戸塚は新興教育運動に加わり、1932年には振興教育同盟準備会静岡支部を結成し、このため翌33年3月に検挙され、免許状剥奪の処分を受けている。このような経緯を持つ戸塚は、1929年に初めて野村の研究発表を聞き、感銘を受けたこともあり、処分後、野村のもとを訪れ児童の村小学校で働くこととなる。戸塚にとって野村はまさに恩人だったのである。しかし、1年の後、雑誌『生活学校』を立ち上げようという頃の戸塚は変化していた。後に戸塚は当時のことを以下のように振り返る。

（略）一年前にはまったく野村先生に傾倒しきっていて、先生の教育に多少の社会性を加えて全国に普及させることができれば、自分の分に応じた役割がはたせるくらいに考えていたわたしが、教育理論書をならべて「野村氏頼るに足らざれば独立計画を立てんとなり。意気やよし。」と書いているように、先生をのりこえて独立人となることを決意させるに至った意味でもこの一年間は貴重なものであった。⁵ 55-56 P

このことから戸塚は野村を超えようとしていることが分かる。しかし、この頃の戸塚の、地域との交流を持つ公立学校に比べて児童の村小学校のような私立学校はそのような教育的機能を持たないという問題意識を、すでに野村自身も持っていたということに戸塚は気付いていなかった。

このように一致団結していたとはいいがたい状況ではあったが、雑誌創刊への構想は進められていく。そして1935年1月に創刊号として新聞型の『生活学校』が刊行される。ここには最後のページに「『生活学校』編集部」として野村芳兵衛と戸塚廉の名が併記され、

『生活学校』営業部』の肩書きで須藤紋一の名が載せられている。須藤とは、戸塚が後に「影の力！須藤紋一夫妻」という書記を残していることから分かる通り、『生活学校』に尽力した人物である。「三鐘印刷」という会社を営んでいた須藤は、池袋児童の村に惚れ込んでおり、自身の4人の子どもたちも児童の村小学校に入れている。『生活学校』の刊行に当たっては「児童の村のような、先生たちに二十円か三十円しか月給の出せない極貧学校で赤字が出たらどうするんです。この仕事はまあ、私が道楽をするつもりで経営の方を引き受けましょう。」⁵_{72P} と、『生活学校』のために「扶桑閣」という出版社を創立した。戸塚は須藤のことを「政治や文化に関して犠牲的にやっている仕事には商売を忘れてわがことのように身を入れる善人」⁵_{72P}、「身を犠牲にして正しいと信ずることに没頭する人」⁵_{73P} と述べている。

さて、この記念すべき創刊号の編集後記として「計畫一年」が掲載されている。その中に「百に餘る教育雑誌の中に交つて、僕たちの小雑誌がどこに立場をおくべきかに就いては色々と考えさせられた。」⁶と書かれている。そこで問題になるのは読者をどの層に置くかという点である。編集部は「一番文化的に低い人たち」にいい文化を紹介し、理解してもらうことが教育全体を高めることになると考えるが、その仕事の困難さ故に最終目標をそこに定め、「その仕事の協力者」として「今かりに、教育に積極的な興味を持てる人、子供の好きな教育者、文化藝術に関心を持つ人」⁶_{12P} を読者層として設定する。次に、どのような内容を持った雑誌にするかという問題であるが、様々な議論が交わされた上で「面白く讀めて、その中に系統的な理論の脈々と動いてゐるもの」⁶_{12P} といったものになった、とある。

また、「百に餘る教育雑誌」とあるが、その中の代表的なものに小砂丘忠義が編集長を務める『綴方生活』がある。『綴方生活』とは1929年10月に志垣寛・上田庄三郎・小林かねよ・峰地光重・野村芳兵衛らを同人として創刊された教育雑誌である。1930年には志垣が小砂丘らによって追放され、小砂丘・上田・野村・小林・峰地によって第2次『綴方生活』として再スタートを切っていた。これ見ても分かるように『生活学校』と『綴方生活』の同人は重なっていたのである。「児童の村では、最初は雑誌『教育の世紀』を通して、生活教育の思想的運動を展開し、つづいて雑誌『綴方生活』によって、愈々、生活教育の実践をよびかけた」⁷と述べていることから分かるように、野村は『綴方生活』を児童の村小学校の機関紙的な雑誌であると考えていた。では、なぜ戸塚らは新たな雑誌『生活学校』を必要としたのだろうか。戸塚は、1934年1月21日の日記に「『綴方生活』の事務員として働くならやってもいい。然し、自分の『仕事』として、『綴方生活』を自分の文化運動の足場とする気はしない」⁵_{29P} と小砂丘に述べた、と書いている。この時期は児童の村小学校の新入生獲得のための宣伝活動も兼ねて『児童の村』という雑誌を発行するということが決定し、その準備活動に戸塚が奔走していた時期である。同じ日記に「『綴方生活』系のいやみのある文学青年たちと協力する意志は毛頭ない。(中略)はじめからそういう気持はあったのだ。『児童の村』をいいものにすること。それに専念しよう。」⁵_{29P} とある。この『児童の村』という雑誌の構想が、1年の後に『生活学校』として実現するのである。この時の気持ちを戸塚は後に「十分意識的ではないが、『綴方生活』の仕事にないもの、『綴方生活』を生きかえらせ、それを延長するだけでは達成することのできない何ものかがオレの中にあるのだという感じがあった」⁵_{32P} と述べている。また、戸塚は『綴方生活』に集まる人々を「東京で老化し頹廢し変革への意欲をすりへらした生活綴方人」と批判するが、「わたし

は、けっして生活綴方教師全体を否定したのではない。それどころか、生活綴方教師にこそ時代を背負うエネルギーを期待していた」⁵_{33-34P} と、述べる。そのような戸塚は、「地方の現実に根をはった人びと、特に北方教育社を中心にしてきびしい東北農村の問題解決にとりくみ、県をこえて、全東北地方全域にわたって組織をすすめている人びとに（略）深い関心をもっていた」⁵_{34P} のであり、その後、戸塚は北方の綴方教師たちと深いかわりを持ち、『生活学校』も北方教師たちによって支えられていくことになる。また、『綴方生活』を批判的に見る戸塚であったが、「念のためにことわっておくが、わたしは小砂丘さんをきらっていたのではない。昭和十年ころまでの知人で若くして死んだ叔父の戸塚猛を除けば、小砂丘さんくらい好きだった人は見当たらないといってもいいだろう」、「（小砂丘は）綴方をとおして、子どもの心を見ぬき、心の喜びと悲しみを子どもと一体になって感得することのできた無類の直観人であったし（中略）ふところの深い自然人であったように思う。」⁵_{34P} と、小砂丘への想いを綴っている。また、小砂丘も『生活学校』を高く評価し、『綴方生活』1935年2月号では、「児童の村新文化雑誌『生活学校』の発刊」と題して、「熱心な教育人が健全な教育文化人となり、明るい芸術的科学的な教育が全国に行亘ることを熱望する編輯同人の良心の高鳴りが感じられる。」⁸と『綴方生活』読者に『生活学校』の購読を薦めている。1937年10月に小砂丘が死去した際には『生活学校』は11月号において「友誌『綴方生活』の主幹小砂丘忠義」という、死を悼んでの特集を組み、追悼文を掲載している。このことから『生活学校』と『綴方生活』の友好的関係は見て取れる。

以上のことから、戸塚は小砂丘を敬愛し『綴方生活』の一定の意義を認めた上で、そこではできない自分独自の役割を発揮できる仕事として『生活学校』を構想したことが分かる。先にも挙げた創刊号の編集後記には、「いつも最低の文化水準に沈^マさせられている小学校教育に、最も進んだ、諸科学、文学、美術、舞踏、劇、音楽、映畫等々の藝術の動き、當面の問題を紹介導入することが非常に大切なことだと思ふ」⁶_{12P} とある。実際に創刊号を見てみると、「回顧と展望 三四・三五年の藝術界」の中で、展覧会・文芸・新劇・舞踏・映画・音楽が取り上げられている。その他、同人の隨筆や短歌、哲学研究、文化研究、児童作品もある。もちろん児童の村小学校での実践報告や教育理論も展開され、その内容は充実したものである。『生活学校』は、教育に視点をいた総合的な文化雑誌としてスタートを切ったのである。

さて、新聞型の体裁を取った『生活学校』は創刊号である1月号から5月号まで、野村芳兵衛が巻頭論文を飾る。1月号では「一九三五年の教育 文藝教育の復興」、2月号では「宗教々育と科学教育」、3月号から5月号にかけては「生活学校とは？ A君と私の會話」という會話文の形式で自己の主張を展開した。「宗教々育と科学教育」において野村は「科学を可能にするものが宗教なのである。従つて宗教なくしては科学は成立しないのである」⁹という立場を取り、「左翼運動による宗教否定」⁹_{1P}を批判する。また、「生活学校とは？ A君と私の會話」では、「信による友情と公利の生活」の生活様式を原理とする「共同体社会」の構築を説き、「ナチスのやうな奴隷主義」や「分裂的個性主義」を批判し、「個性的表現を持った全體的組織」¹⁰_{1P}を要求する。そして、野村は「学校生活を共同体社会に組織し得る自然可能」の有り所を問われた時、「それは、我が國體にあるのです。日本の國は、天皇を親として信賴によつて結合する億兆一心の共同國です」¹⁰_{1P}と答えるのである。このような野村の考えは、親鸞の思想への深い信仰を根底にしたもの

であり、決してファシズムに加担するものではなかった。なぜなら野村は「国体」と「政体」とを峻別し、「国体」は自然発生的なもので、「政体」は民主的に変革されるべきものと考えていたからである。しかし、野村のこのような叙述は、天皇制ファシズムの受難者であった戸塚を初め、『生活学校』の読者には、国家主義的な危険思想への転向として受け取られてしまった。戸塚は、次のように述べる。

(略) これにはわたしはまったく失望せずにはいられなかった。このままつづけていけば、この雑誌は戦争準備の方向に直進している文部省と同じ道を歩むことになってしまう。これはわたしをはじめとして、野村先生に傾倒している先進的青年教師の先生を信頼し尊敬する思想的根源であった前記『生活訓練と道徳教育』に暗黙のうちに語られている天皇制否定の精神、科学的合理的に自然と社会を見る立場とはまったく背反して、それらの立場を抹殺しようとする天皇制をファシズムを結合しようとする理論だと思われた。しかも、先生に絶対の信頼をよせている全国つづよりの先進的教師たちは、先生の強い説得力によって、文部省よりも効果的に戦争勢力の側にひきよせられる危険があるように思われた。⁵ 102 P

この戸塚の反応は、野村の理論を正しく理解しているとは到底言えないものであるが、当時の情勢、そして戸塚の置かれた状況からに見れば致しかたがないものであった、といえよう。このようにして、『生活学校』内部の矛盾はその亀裂を深めていった。

1935年1月の創刊号より新聞型だった『生活学校』は、同年7月号より菊判となる。『生活学校』をより充実したものにしようとの意図のもとで、新聞型より雑誌型の方が字数が多く入るための変更であった。この号からの『生活学校』は、その体裁だけではなく、性格や方向性も変化してくる。戸塚は「雑誌型になった十年七月号から、わたしの編集態度はいちじるしく国民の生活現実にせまろうとしてくる」⁵ 109 P と述べる。戸塚自身がその例として挙げているように、同号ではこれまでもあった「月の文化史」というその月の年中行事を紹介した記事が、さらなる発展を遂げ、「七月 自然・社会・歴史」として巻頭3ページに渡って掲載されている。この記事は、7月の行事を紹介するだけでなく、清少納言の『枕草子』を引き、農村の厳しい現状を描写し、そこに生活する子どもと教師にも目を向けている。この文学や文化の振興だけでなく、社会的現実の中で子どもを捉えていく、という視点が明確になった同号同記事に関して、雑誌『教育北日本』第1号(1935年9月号)の「新秋・読みものを語る」と題された座談会のなかで、北方の綴方教師で、後期生活主義教育論争の重要人物である佐々木昂は「あれはいよ、月の暦を説明してそれがチヤンと指導性を持つてゐるからね、戸塚は偉いよ」¹¹ と述べている。この新たなスタートを切った『生活学校』において、1935年8月号より小川実也と野村芳兵衛の論争を中心とする前期生活主義論争が行われるが、その詳細は別に譲る。

前期生活主義論争が展開されている時期、『生活学校』の母体である児童の村小学校は存亡の危機を迎えていた。本論考の主旨から外れるためその詳細はここでは割愛するが、1936年7月19日、池袋児童の村小学校は解散式を行い、ここに13年余りの歴史に幕を下ろすことになる。『生活学校』4月号の「談話室」では野村が「此頃は学校が地所問題で大いに困ってゐる。そのため生活学校の原稿も早く書かないで戸塚君に迷惑を掛けている次第

だ」¹²と、編集後記では「児童の村は今敷地の問題でかなり困難につき当っており、そのために野村さんは一日も心を休める時がなく……」¹²_{48P}と書かれている。そして、6月号の編集後記で、戸塚の名において以下の重大な発表がなされる。

(略) 児童の村は大體に於てこの七月他の場所に移轉して、野村氏をはじめ現職員は總辭職することになる。従つて、児童の村生活教育研究會なるものはなくなるわけである。然し、もともとこの雑誌は児童の村の機関紙ではなく、扶桑閣の雑誌を児童の村生活教育研究會が編輯を引うけたにすぎないので、この雑誌がなくなるとゆうことではない。むしろ、雑誌は學校の研究會が編輯するとゆうことから來る制限を離れるために、より自由な編輯を出来るやうになるだらう。¹³

この戸塚による発表は池袋児童の村小学校の閉鎖を初めて公にしたものであり、読者に衝撃を与えたであろう。そして、「もともとこの雑誌は児童の村の機関紙ではなく、扶桑閣の雑誌を児童の村生活教育研究會が編輯を引うけたにすぎない」という戸塚の言葉は不可思議である。なぜなら、『生活学校』は児童の村小学校を母体とする児童の村生活教育會の雑誌であり、児童の村の教育に共感した須藤紋一が出版社扶桑閣を立ち上げてその印刷・発行を引き受けていたからである。この疑問に対して、後に戸塚自身が以下のような告白をしている。

(略) 野村先生にたいして、このわたしの文章は、いかにも心ない冷酷なものだったと、われながら冷や汗の出る思いをする。二十九才の若気のいたりというものだろうか。悩みながら書いたとはいえ、もうすこし何とか書きようがあったのではないかとくやまれる。

ことに「この雑誌は児童の村の機関紙ではなく、扶桑閣の雑誌を児童の村生活教育研究會が引きうけたにすぎない」というのは、明白ないつわりである。わたしは物心ついてから、今日まで「敵」以外のものに重大なウソをついたおぼえはないが、このウソを、大恩人の野村先生を裏切る形でついていることは、今にいたるまでの心の深いキズとしてうずまいている。「児童の村」の解散によって「生活学校」が廃刊に追いやられることを防ぐための悪あがきであった。⁵_{122P}

40数年の後にこのような告白をした戸塚によって、この謎は解けたわけであるが、深い後悔と反省を示す戸塚に対して、当時の野村の態度は冷静かつ寛容であった。野村は、戸塚の発表の次号に当たる『生活学校』7月号で「私共も生活教育に対する熱意と勇氣を更に失つてゐませんから、安心していただきたいと思ひます。」「児童の村生活教育會をどうするかに就いてもまだ考えてゐませんが、『生活学校』だけは、必ず繼續する案が出来てゐますから、その點も御安心下さい。」「子供を教へる家はなくなつても、生活教育に対する所信と勇氣とは更に失つて居りません。どうか、各地の生活教育研究會の會員諸君も、こんなことで勇氣を失はないやうにして下さい。」¹⁴などと綴っている。しかし、これら野村の温かい言葉が、實質上野村の『生活学校』における別れの言葉となつてしまった。児童の村小学校は7月19日に解散し、生活教育研究會も解体となつてしまうのである。その後8

月号で巻頭言と論考を発表したのち、野村は『生活学校』の第一線から離れることとなる。『生活学校』は8月号の後、9月号は刊行されず、10月号より戸塚廉が編集長を務める新たな『生活学校』がスタートすることになる。新しい編集グループには、石田宇三郎、黒滝成至、増田貫一が名を連ね、当時法政大学教授であった城戸幡太郎をリーダーとして選び、協力を要請した。また、顧問としては、留岡清男、羽仁もと子、赤井米吉、波多野完治、小川実也、そして野村芳兵衛らが加わった。そして、戸塚らは『生活学校』の熱心な読者であった北海道・東北の綴方教師たちとの関係を深め、『生活学校』運動を展開していった。戸塚らはかねてより企画していた北海道・東北巡回を8月6日から8月25日にかけて実行し、その様子は『生活学校』10月号で戸塚によって「北國の教育とその人々」として発表されている。

また、戸塚のメモによると、新たな『生活学校』スタートに際しての会議の中で次のようなことが議論されたという。

1、反省の態度

本当な自治生活（子供）ができているか。

研究心がハツラツと動いているか。

学科が学習生活に包摂されているか。各自が独立した生活者になっているか。

学習を通じて生活技術がねらわれているか（政治的能力をふくめて）。

子供の生活が学校で生かされているか。

学級は広いいみの影響を組織するいとなみとなっているか。

子供が幸福になる方向にすすめられているか。

（中略）

3、方法

現実に合うか。

要求された効果が出ないのは方法が悪いから。

新しい方法の提唱は、どう現実の学校に取り入れられるか。

材料はどう教材化されるか。

その仕事の子どもの将来に対する意義。⁵ 141～143 P

このメモにはこの他に「手がかり」として教科ごとの取り扱いや課題も書かれている。これを見れば、戸塚らが目指した新しい『生活学校』が、教育活動の内容と方法に関して、科学的・実践的に切り込んでいこうとしていることが分かる。10月号では「新しい出発に當つて」の中で、「本當の教育と発見して行くものは學者理論家よりも實際教育に當る者であり、その場所は圖書館や書齋ではなくて、街や村、學校、學級である。書齋の研究、學説えの妄信、評論家の指導から解放されよう。現實に立つて自分たちで仕事を進めよう。」¹⁵と、全国の教師たちに呼びかけている。このように教育現場を第一に考えながらも、城戸や留岡といった学者の協力も得た雑誌として『生活学校』はより重厚なものとなっていたのである。

さて、次節で取り上げる1938年1月号より続く後期生活主義論争の最中、『生活学校』は、1938年8月号をもって廃刊を迎える。その理由を編集長の戸塚は「経営上やっつけいけなく

なったというのがいちばんかんたんな言い方かもしれない。しかし、ほんとうは、わたしがくたびれてしまったからだといったほうが正しいだろう」⁵_{333 P} と述べる。この頃、読者数は1000人を超えることが困難となり、最終号の読者数はわずか583人であった。さらに経営難からの生活苦が戸塚の妻を蝕んだ。5月号編集後記には「この間 私事にわたつて恐れ入るが 僕は二月以来全快せぬ妻の病気が四月になつて俄に重態に陥り、四月下旬には遂に入院させなくてはならぬことになり、泣面に蜂といつた形になつた。幸にして去る六日に退院はしたが、今後約二十日は絶対安静、あと半年なり一年なりを長期抗戦の闘病生活に入ることになつた。」¹⁶ とある。さらに、戸塚も身体を壊した。

しかし、こういった要因以上に大きなものとして、『生活学校』の持つ思想の弱さが挙げられる、と戸塚自身が後に告白している。1937年には日中戦争が勃発し、1938年4月には国家総動員法が公布され、日本の情勢は日に日にファシズムへの道を進んでいった。そのような状況のなかでの『生活学校』の性質を戸塚は以下のように述べる。

(略) このような状況のなかでどうこの運動をつづけていくかに、わたしは思い悩んだ。この雑誌は、もともと、一定の明確な運動方針をもった組織体のものでなく、わたしの可能なかぎり社会の進歩に役だちたいという願いを周りの同じ願いの友人や学者文化人たちが、それぞれの思いで助け、利用するという関係で成立させてきたものだから、一定の政治的状況に対処して方針をきめ、力を集中して権力と戦うといったものではなかった。⁵_{336 P}

こういった「弱さ」を持つ『生活学校』は、弾圧によって自己の主張の発表の場を奪われた先進的文化人らに活用され、それは経済的に逼迫した編集部や、先進的文化人に思想的共通点を見出した地方の教師たちに歓迎され、雑誌は人民戦線の教育運動の様相を呈してきた、と戸塚は言う。しかし、組織的な議論はなされなかったため、国家の戦争政策に対する姿勢としては、個々人が自己の主張を展開していくに留まった。

また、戸塚自身の自信の喪失もあった。論争の詳細は後にまとめるが、留岡の綴方教師批判が発端となる後期生活主義論争の際、戸塚は論争をさばいてまとめていく力を持ち得なかった。戸塚は「生活綴方人になりたい留岡批判以来、わたしはこの雑誌で読者とともに強く歩み進んでいく自信をうしなっていたようにおもわれる」⁵_{337 P} と述べる。先にまとめたように戸塚編集となった『生活学校』は、現場の教師たち実践家と大学教授ら理論家の双方の協力を要請し、理論と実践の交流を試みた。しかし、それは成功したとは言えず、『生活学校』は主に実践家の交流の場としてその成果をあげてきた。そして双方の間に立つ戸塚は、自身が「無理論コンプレックス」⁵_{339 P} と呼ぶ劣等感に悩まされていた。戸塚は「わたしは自分のまわりに集まってくる多くの学者や理論家から耳で学問して自己流に手さぐりで雑誌を作りつづけながら、自分の仕事の客観的な価値については確信をもつことはできなかった」⁵_{339 P} という。このような戸塚にとって留岡の批判は耳が痛いものであった。留岡の批判を受け止め、その意義を考え、教師たちの実践の自己反省・自己検討を促す、といったものが戸塚のとったスタンスではあったが、「生活綴方人としてもハンパもの」⁵_{339 P} という自覚を持つ戸塚は、留岡に反論を繰り返す綴方教師らに対する劣等感もあいまってこの論争に深く介入しようとはしなかった。

このような留岡の自信の喪失と経営難、妻や自身の病気、そして『生活学校』のもつ役割の不鮮明化などが重なり、1938年8月号をもって『生活学校』は廃刊となるのである。表紙には「終刊號」と表記され、巻頭に戸塚が「終刊に際して」という手記を寄せる。また、高山一郎が「終刊號に寄せる 生きて行く支えをうしなう感じ 獨白ふうに 」を、黒瀧成至が「『生活学校』に送る」を寄せ、その廃刊を惜しむ。その中で、高山は「何ともいえない寂寞がだんだんに體の中え広がっていった」と戸塚の手紙で廃刊を知った時の心境を語る。また、黒瀧も以下のように述べる。

(略)『生活学校』と讀者との關係わ、ほかでわとても見られないだろー。『生活学校』がどーなつても、僕たちのこの深い關係わ生かさなければならぬ。みんなが手紙お書き合い都合して訪ね合おうそれだけが残った道だ。いや、これこそ『生活学校』の生きる道だ！

『生活学校』よ、みんなよ、だから僕わ「さよなら」わ言わない！¹⁸

このように、同人たちに惜しまれつつも『生活学校』は戦前期におけるその歴史に幕を下ろしたのであった。池袋児童の村小学校の機関紙としてスタートした『生活学校』は、その体裁だけでなく、内実も変化しつつ、成長を遂げてきた。生活主義教育という大きな理念を共有しながらも、総合的性格を持つが故に内部矛盾を常に抱えた形であったが、だからこそ多様な論争の場となり、大きな歴史的役割を果たしたと言える。『生活学校』は戦後に波多野完治らによって再刊され、戦後の民主主義教育の構築に尽力するが、戦後『生活学校』に関する考察は別の機会に譲る。

3、『生活学校』・『教育』に見る後期生活主義教育論争

日本教育史のなかで、生活主義教育論争と言う時、1938年からの戸塚が編集長を務めていた『生活学校』誌上、教育科学研究会（以下「教科研」と表記する。）機関紙『教育』誌上を舞台に展開された論争を指すことも多い。また、戦後には、1952年にカリキュラムにおける「生活」と「系統」の問題をめぐるいわゆる「勝田・梅根論争」も起こり、これも「生活主義教育論争」と呼ぶことができる。しかし、ここでは、戸塚編集『生活学校』及び教科研機関紙『教育』誌上の論争の布石ともなった、雑誌『生活学校』誌上における1935年8月号からの翌年にかけて行われた野村・小川論争を「前期生活主義教育論争」と定め、戸塚編集『生活学校』及び教科研機関紙『教育』誌上の論争を「後期生活主義教育論争」とする。本論考では、主に生活綴方の有様が争点となった後期生活主義教育論争を取り上げたい。

後期生活主義論争の発端は、教科研機関紙『教育』1937年10月号における城戸幡太郎、留岡清男の掲載論文である。城戸は「生活学校巡礼」と題した論文の中で「児童の作品を通じて児童の生活を理解することはできる。しかし綴方教育のみによっては児童の生活は指導されない。教育における生活指導の原理は国民の生活力を涵養することにある。」¹⁹と述べる。また、留岡は「酪連と酪農義塾」で綴方教師の生活指導は「児童に実際の生活の記録を書かせ、偽らざる生活の感想を綴らせる。するとなかなかいい作品が出来る。之を

読んできかせると生徒同士がまた感銘を受ける」というものだが、ただそれだけでしかないとし、「私はいずれそれ位のことだろうと予想していた」²⁰と手厳しく批判する。そして「このような生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まって、感傷に終わるにすぎない」²⁰_{60 P}と述べる。この留岡の発言を取り上げ、雑誌『生活学校』は1938年1月号で「綴方検討特輯(1)」を特集し、その後も同年2月号で「綴方検討特輯(2)」、6月号で「生活教育の問題(三)」、そして廃刊を迎える8月号で「生活教育検討(4)」と、計4回この問題の特集した。『生活学校』2月号では留岡清男が「教育に於ける目的と手段との混雑について 生活綴方人の批判に答へる」という論考を発表している。また、『教育』誌も1938年5月号で「生活教育特輯」を組んだ。この論争は、当時生活綴方教師たちの多くが読んでいた『教育・国語教育』『綴方学校』『実践国語教育』など、多くの雑誌に波及したが、ここでは主に『生活学校』および『教育』を舞台としてこの論争を追っていきたい。

『教育』1937年10月号における留岡発言に対して、全国の綴方教師は『生活学校』1月号において一斉に反論する。この号に9氏による反論が掲載されるが、『生活学校』2月号にて、留岡は「教育に於ける目的と手段との混雑について 生活綴方人の批判に答へる」の中で「坂本、高橋、山田三氏は真正面から私の拙文の一節を問題にしてゐるのであつて他の六氏は私の拙文の一節にことよせて、自己の生活綴方の態度なり業績なりを語られてゐるに過ぎない」²¹と述べ、これら3氏へ返答を寄せる。では、坂本、高橋、山田の主張はそれぞれどういったものであったのかを見ていきたい。

北海道の坂本磯穂は、子どもを知る最上の方策が綴方であるとする。そして、貧しい家の子どもたちが「家の生産場面に参加させられる事實に着目して、先づその労働の場面に綴方に書かせることに出發」し、「子供は子供として、家業や家の經濟を理解させ、忍苦の中に立ち上る彼等の氣力を獎勵した。家の仕事に、又家の仕事に参加する家族へ、彼等の愛情を育て上げようとした」²²と述べる。このような坂本らの綴方の教育実践は、「他のどのやうな教科にもまして生活的で」あり、「最小限度を保障されざる生活の事實から遊離して、最大限度に満足する一般論を教えてゐる」²²_{39 P}という留岡の批判の対象にはなり得ないと反論する。また、坂本は「教科への再認識」と題し、綴方だけに生活教育を限定するつもりはないことを主張する。坂本は「僕たちは綴方をやるために綴方に執着してゐるのではなく、僕たちの念願とする教育が、綴方に於いて最も手近に果されると信じるがゆゑに綴方に努力をうち込めてきた。だからもしも假に綴方以上に生活教育の展開が可能な教科があつたら、僕たちはあへて自分の志向や性格や能力などのさまざまな困難を乗り越えても、なほその教科にいままでの熱意と努力をふり替へるであらう」²²_{40 P}と述べる。

岩手の高橋啓吾は、留岡が批判するような「鑑賞から感傷へ」といった指導は行ってはいいないとして、具体例として1人の子どもの詩を取り上げる。高橋は「綴方に於ける生活指導過信論」は己の以前の過ちであると反省を示すが、「留岡氏がいふが如き」「否定論に近いもの」に対しては異を唱える。そして高橋は、留岡が生活主義の教育を「端的に言へば最小限度を保障されざる生活の事實を照準にして思考する思考能力を涵養することである」²⁰_{60-61 P}と述べたことに対して、デューイや甘粕石介らの教育論と比較し、「留岡氏の主張は、生活教育の一部面であり、それも大人の生活の一部(可性重要性を占めるものだらうが)であり、児童へそつくりとあてはめることは、出来がたい」²³_{45 P}と批判する。

東京の山田清人は、留岡の綴方教師批判は事實の誤認から出發した的はずれなものであ

ると反論する。留岡の「児童の作品を通じて児童を理解することは出来る。しかし綴方教育のみによつては児童の生活は指導されない」という意見に対し、山田は「一たい北方の人達は、綴方教育のみによつて児童の生活指導がやれると信じ、又やつてあるのであらうか。否、絶対にさうではないと言える」²⁴と述べる。山田は「綴方を通して、児童自身に現実の生活を認識せしむる」²⁴_{65P} ことができるとし、留岡の生活主義教育論の発展形態のひとつとして生活綴方を取り入れるべきであると主張する。

このような諸々の批判に対し、留岡は論を展開する。まず、生活綴方教育は「鑑賞から感傷へ」といったものではないという坂本と高橋に対しては、その根拠となる方法論や教育的効果を示すよう要求する。また、前述の山田の指摘に関しては、それこそが曲解であり、自分が示したのは「生活教育の一般原理を綴方といふ一教科の理念乃至方法として消化してはくれまいか」²¹_{12P} という希望であるという。高橋が留岡の生活主義教育の定義を取り上げ問題にしたことに対しては、自分は生活主義教育という言葉で定義づけしたつもりはないし、また、そのような定義づけに必要性を見出さない、という立場を取る。留岡は「如何なる方法と如何なる手順とを必要とするか、といふ問に對する答の方が重要である」²¹_{15P} と主張し、方法論の検討と提示にこだわっている事が分かる。

ここで、留岡が論争の発端となった論考で生活主義教育を「端的に言へば最小限度を保障されざる生活の事實を照準にして思考する思考能力を涵養することである」²⁰_{60-61P} と述べていることに注目したい。教科研はその理念に「生活主義と科学主義」を掲げていた。この留岡の言説から分かるように、教科研で言う生活主義とは、生活の保障を目指すことであり、科学主義とはそのための方法論であった。ここに留岡が綴方教師らに対して方法論の提示を強く求める根拠がある。留岡にとって、目的・目標と方法との論理的非対応性は許しがたいものだったのである。そこで「目的と手段の混雑」や「綴方教師の鑑賞に始まって、感傷に終わるにすぎない」といった留岡の、あるいは「綴方生活は児童の生活を理解し、生活態度を自覚せしめることはできるが、彼らの生活力を涵養することはできぬ。」という城戸の批判が出てくる。そして、それに対して綴方教師たちが反論するわけであるが、この教科研系統の2人の認識に関して、綴方教師批判の立場からではなく、妥当性を見出す先行研究者に中内敏夫がいる。中内は以下のように述べる。

(この2人の生活綴方論は) その対象規定の正確さにおいて、必ずしも「無理解」といえるものではない。かれらは、生活綴方のしごとを、「理解」と「鑑賞」にはじまり、「自覚」と「感傷」とにいたる体系と規定した。(中略)生活綴方のしごとをこれほど適確に、人づくりの立場からとらえたものはないことも事実だろう。というのも、人づくりの立場とはすぐれて、心の評価と制作の立場だからである。「理解」し「鑑賞」することは対象をとらえて評価することであり、これに「自覚」させこれに「感傷」することは心の制作の作用の一階梯である。生活綴方運動は、科学運動や政治運動でなければ、人づくり運動だったのだから、その本質は、これを借り物ではない人づくりのカテゴリーでとらえようとしたときはじめてその本質を露にする。²⁵

このように、城戸と留岡は生活綴方の持つ本質を理解していたと言えるが、それは否定的言説の上でなされたものであった。そして、彼らは目的と方法の素朴2元論に立って、

綴方教師を批判した。そのような生活綴方の持つ性格と、この論争の構造を綴方教師たちが理解しえなかったが故に、綴方教師らは、留岡の言うような実践はしていないと繰り返すばかりで、その反論は説得力の弱いものとなってしまったのである。

さて、留岡は「教育に於ける目的と手段との混雑について 生活綴方人の批判に答へる」の中で綴方教師たちに次の2点を問う。1点目は、先に挙げたように「生活綴方人が考へてゐる生活綴方の目的についての観念ではなくて、言ひ換えるならば、生活綴方人の抱懐してゐるつもりではなくて、生活綴方の方法と技術及びその実施の効能」²¹_{18P}である。そして2点目は「生活綴方人は綴方といふものを生活を指導する方法や手段として利用するのか、それとも綴方を指導する方法や手段として生活と生活の手段とを利用するのか」²¹_{18P}ということである。この観点は重要な問題点として後の論争に引き継がれていく。

また、留岡はこの論文のなかで綴方教師たちに対して次の2点を提案・主張する。1点目は、当時の現行教科課程を大前提とするのではなく、「現行教科課程そのものについての根本的検討をなし、生活教育に適合する教科課程を研究し、建設してみること」²¹_{20P}である。2点目は「綴方教育の本来の任務が、生活技術の文表現としての能力の訓練にある」²¹_{19P}ということである。このような留岡の主張は、戦後の「勝田・梅根論争」にも通じるカリキュラムの改革の可能性を持ったものであり、当時の教育界に対する重要な問題提起であった。しかし、時代は1941年の太平洋戦争に先立ち、急激にファシズム化し、国家権力は生活主義教育の思想に対する弾圧を加えた。当時の国家主義の流れの中にあつて、綴方教師たちが留岡の提言を受けとめ、生活主義教育の視点からカリキュラム改造を推し進めることは不可能であり、その実現は戦後を待たねばならなかった。

この論争が『生活学校』に掲載された年の『教育』5月号で『生活教育』特集が生まれ、『生活教育』座談会』が掲載される。メンバーは、石山脩平（東京高師教授）、岩下吉衛（小松川第二小学校長）、黒滝成至（教育科学研究会会員）、今野武雄計（教育科学研究会会員）、佐々木昂（秋田県前郷小学校）、鈴木道太（宮城県入間田小学校）、滑川道夫（成蹊学園小学部）、百田宗治（『綴方学校』主宰）、山田清人（深川区毛利小学校）、山田文子（本所区錦糸小学校）、吉田瑞穂（杉並区第八小学校）、城戸幡太郎（『教育』編集部）、留岡清男（『教育』編集部）、菅忠道（『教育』編集部）、の計14人である。後期生活主義論争第1段階ともいえる『生活学校』誌上での論争に深く関わっていた、『教育』編集部の城戸幡太郎と留岡清男、留岡らに異を唱えた山田清人、そして筆者の今後の研究の中心人物となる成蹊学園小学部滑川道夫が参加していることに注目しておきたい。また、滑川はこの号に『生活綴方の問題史的検討』と題した論考を発表しており、生活綴方の歴史的検討を行っている点も記しておく。

さて、座談会は「生活教育とは何か」という問題で石山が口火を切る。石山は、生活教育は「生活準備説」から始まったが、今日では「現在の子どもの生活そのものを教育化して行く」²⁶ ことに変わってきた、と述べる。石山は「生活」を概念上、「教科生活」と「日常生活」の2つの層に分け、「日常生活を教科生活に高めて、それが又日常生活に還ることに依つて、教科生活前の出発点であつた日常生活よりもつと高められた日常生活になる」²⁶_{72P}と主張する。これに対して、城戸は「日常生活と教科生活とは初めから並行して居」²⁶_{72P}り、「教科生活」は「日常生活」の中から発達すべきものであり、そのために現行の教科課程に不足があるのであれば、新しい教科を模索すべきであるとする。

「御茶の水女高師小で北沢種一のもとで作業主義の教育にない、『生活算術』という新しい主張と実践のリーダー格の人物」²⁷であった岩下は、「生活教育とは實用的に役に立つといふ意味ではなくて、日頃子供が目に觸れて居る所から出發して、本質的な教科の領域に進んで行くといふことなのです」²⁶_{72 P}と述べる。岩下は、「教科の生活化」を志向し、その限界を北沢種一の作業主義の算術教育・読方教育の理論によって克服するに至った旨を報告する。

中野はこれら石山、岩下は「生活と教科の結びつきを、『教科の生活化』という、いわば、教育方法の次元で考えている」、「だから、石山の生活綴方の教育に対する評価も、生活実現とそれともなう生活環境の重視ということを『功績』としたが、綴方教育が、その『本質』を離れて、実際の生活の調査や探求につきすすんでいくことをむしろ『欠点』だ、というふうに理解している」²⁷_{48 P}とまとめる。

このような議論を聞いた上で留岡は、「生活教育と言ふものには、算術型と綴方型とがあり、「算術型」では方法論に重点が置かれるのに対し、「綴方型」では「生活によつて綴方を指導するといふよりも、綴方によつて生活を指導するといふことが目的」であり、「生活教育には方法的な生活教育と目的的な生活教育とがある」²⁶_{73 P}と述べる。留岡はこのような「綴方型」のあり方に疑問を呈し、「綴方教育の方法や技術の問題は現在でも取残されて居る危険性があると思ふ。だから、目的論をやめて、實際教材の取扱に就て共同的に議論して行ったら一層具體的になるのではないか」²⁶_{73 P}と主張する。

この留岡の生活綴方の目的と方法とが対応していないという批判に対し、佐々木は「僕等が生活綴方教育を提唱した時の情勢を言はなければ駄目だと思ふのです」²⁶_{76 P}と述べ、「私の方の東北で生活教育が必要とされた形から見れば、何か個人的な子供達の生活を教科的に何とかしなければならぬといふ前に、子供達の生活をなんとかしなければならぬといふやうな問題が實際的には中心になって」²⁶_{78 P}いた、と当時の北方教育を語る。また、滑川は「前には生活表現のための生活指導であつたものが、生活指導のための表現になつてきた」²⁶_{77 P}過程を説明する。そして鈴木も「東北地方の綴方教育のなりたちは、日常生活を端的に表現することを最初非常に重要視したことは確かです。それをやつて居る中に凶作になつて、北方性といふ問題が出て來たのです。そこで吾々は成るべくはみ出て來た所を知らうとした。所がそれは綴方では解決がつかないから、いつの間にか綴方教師は生産的の仕事に従事しはじめた」²⁶_{78 P}と、綴方教師が生活教師になっていったことを述べる。座談会の話題はここから、この「はみ出た教育」になっていく。

佐々木は子どもを何とかしてやらなければならないといった「本質」ではない問題に生活綴方の根本がある、と主張する。この佐々木の「綴方がある以上、独自の目的があるが、その結果はみ出していくものこそが本當の教育だと思ふ」²⁶_{79 P}という考えに百田宗治も賛同を示すが、山田は「綴方の本質的價値をさういふ所に求めて、綴方で生活指導が出来るといふ理論は僕は反對だ」²⁶_{79 P}と異を唱える。この「はみ出し」論に関して「教科教育と人間の生き方とのかわりが問題にされたわけであり、ヘルバルト流の教育的教授論的問題なのであるが、『はみ出し』すことの意義、『はみ出し』たものは何か、その指導のあり方等が、十分自覺的に論じられたとはいえない」²⁸と川合は評する。ともあれ、東北の教師たちは子どもたちの綴方に貧しい北方の生活現実を見たとき、表現指導だけに指導を限定することはできなかった。北方教師たちは、子どもと共に社会をどう生きるか、あるいは社会をどう変

革するか、という方面に目を開かされることになる。ここに「綴方教師解消論」が起こる。この「綴方教師解消論」は、佐々木や鈴木にとって、綴方教育の後退ではなく、綴方教育の発展であり進歩であった。そして、佐々木らは部落の再生、青年団の指導といった「生活の前提に入つて行」²⁶_{82 P} くことになるのである。佐々木は「生活教育は生活綴方といふもののみでは出来るものではない。さういふことから、綴方教師といふものを解消しなければならん、といふことになつたのです」²⁶_{82 P} と述べる。このような教師たちの実践は学校教師という職務を逸脱することでもあり、身体的にも容易なことではない。鈴木はかつて部落の生活に入り込んだが、精神的にも肉体的にも追い詰められ、学校の仕事に手が回らなくなり、結局は社会教育から退いた経緯を述べる。このような現実に対して滑川は「綴方教師が綴方に依つて生活を指導することが出来るわけでもないし、しようとするれば悲観する他ない。だから、そこに足場を置いて、もう一度生活教育に於ける綴方といふものを眺めなくちやならん」²⁶_{82 P} と、城戸は「綴方で生活そのものをどう斯うすることは出来ないのだから、どうしても生活に対する態度を教育して行くといふことになるのではないか」²⁶_{83 P} と述べ、綴方教育、そして学校教育固有の意義を問い直そうとする。「先生は将来村落において生活する子供を學校に於て教育すればよい」「先生を矢鱈に社會教育の方に動員することが間違っていることと思ふ。先生は學校に引込んで、學校を通じて子供を社會に出すことを考えて教育すればいいのではないかと思ふ」²⁶_{84 P} と述べる城戸は、子どもを通じた社会教育への可能性を見ているといえる。

これに対して留岡は「今日の農村の現状では、小学校教師を除いたら、その他の何処に部落に直接繋がりを持つ教育機能といふものがあるだらうか。私はないと思ふ」²⁶_{85 P} と学校教育と部落の再生問題とを切り離すべきでないとした上で、「綴方による生活指導といふものは、例えば一升徳利に四斗酒を入れるやうな無理があるんじゃないか」²⁶_{85 P} と綴方教育の限界を見る。そこで留岡が提唱するのが「社会研究科」の特設である。この「社会研究科」は戦後の社会科につながるものであり、ここに至って後期生活主義論争前半の留岡の主張がより一層明らかになってきたといえる。つまり留岡は、官制教育課程の改変を明確に求めていたのである。しかし、当時の歴史的条件のもとではそれは山田の言うように「襖や畳を替へるやうに簡単には替へ」られないものであり、「現實に足場を置いて、多少なりとも足のほうに近づいて行く態度で議論を進めないと、結局お互が文部大臣になつて、所謂實踐にアピールする吾々の切實な問題とは離れてしまう」²⁶_{86 P} という現場の教師たちのジレンマがあった。この留岡の「社会研究科」構想実現のための建設的な議論がなされなかったことは残念なことであるが、戦前においても社会科の設立に関する提言がなされ、生活と教育とを結びつけるという問題に関して議論が交わされた生活教育論争は教育史に残る貴重な財産であるといえる。

この雑誌『教育』における座談会の後に、後期生活主義教育論争の舞台は再び雑誌『生活学校』へと移される。『生活学校』は1938年6月号で「生活教育の問題(三)」を特集し、佐々木昂が「生活・産業・教育」という論考を発表している。その中で佐々木は、『教育』における座談会を「縦とも横とも一層ほんとうの協力が生まれる」²⁹ きっかけとなつたとし、その教育史的意義を高く評価している。佐々木のいう縦と横とは大学に身をおく研究者と、現場の小学校教師たちのことである。佐々木は現場だけのつながりである横の関係に限界を見、研究者らとの協力体制の必要を感じていた。理論と実践との交流に光を見出し

ている佐々木であったが、「私たちはこれまでも留岡氏にさして文句を言はれるまでもない実践に堪えて来たのではなかつたか」²⁹_{9P}と自負を覗かせ、「私たちが実践から顔をあげ不馴れな理論をまとう時、実践が包み切れなくてほころびるのである」²⁹_{10P}とも述べる。一方、波多野完治は『生活学校』1938年8月号において「理論家は根本的改正を要求してうそぶいて居ることが出来る」³⁰と理論家が現場と乖離している点を批判している。波多野の論については後述する。

佐々木はこの論考の中で、留岡が強く主張するカリキュラム改造問題について「生活指導とゆうものが例えば『生活科』乃至『社会科』と稱すべき教科を設け、時間を特設したとしても、現場の情勢から観てうまくゆくとは合点されない」²⁹_{11P}と述べる。佐々木は綴方が日本の生活主義教育の足場であるとし、その意義を主張した上で、綴方人以外の教師の問題意識の低さを批判し、そのような状態でカリキュラム改造を推し進めると、「産業の奴隷となるやうな、志向を子供たちに叩き込むとゆう段取になる」²⁹_{12P}と危惧する。また、佐々木は「もう送り出しているが、満蒙大陸えの方向と工業界えの人的資源としての方向とを基本的な姿勢として考えている留岡氏」³¹とも述べ、留岡の目指す先には軍事目的に奉仕する産業協体制づくりがあると批判しているかのようである。しかし、この佐々木の留岡批判は的を射ているとは言い難い。留岡が、子どもを「人的資源」としてみているような記述は見当らないからである。留岡もまた、佐々木らと同じように部落再生における教師の果たす役割の大きさに可能性をみていたのである。しかし、『教育』における座談会の中で、留岡は以下のように述べる。

(略)生活を本當に指導するといふ立場から言へば、綴方科が一番自由だとか、他の教科に較べて比較的効果があるとかが、さういふことはいへないでもないが、そんなことよりも、青年学校や産業組合や、社会教育施設などの、當然あつて然るべき、而も事實は缺除してあるものについてその確立を考えるべきではないだろうか。

(中略)生活教育の実践の現實は、政策史的に考へる心構が熟さない為に、無理な悩みを敢へてしてゐるのではないか。²⁶_{85P}

この留岡の発言は、1938年当時の教育行政の現状を理解していなかったといえよう。教育の軍事化を進める国家権力の政策意図を把握できなかった留岡の発言は現実から乖離していた。そのような認識の甘さを持った留岡に対し、佐々木は当時学校教育においても大いに推奨していた満蒙開拓団を批判しており、その鋭い眼力は敬服に値する。しかし、1928年から治安維持法違反の最高刑が「死刑又八無期」に引き上げられるような情勢にあって、佐々木のこの発言は危険なものであったともいえる。³²佐々木は、「子供たちをして産業の一コマでありながらも、それは奴隷を意味するものでなく、産業を乗切る或は企劃する意慾や知性やを志向したい」²⁹_{14P}という言葉からも分かるように、生活意欲を持って産業社会を主体的に生きることのできる「産業を乗切る」力の育成を目指したのである。

雑誌『生活学校』は同年8月号をもって終刊を迎える。『生活学校』が終刊に至る経緯は先にまとめた通りであるが、ここではその終刊号における特集「生活教育検討(4)」を見ていきたい。この号では、提案者という形で高山一郎(増田貫一のペンネーム)が「生活教育の再出発のために」という論を載せ、それに対して数人が意見を述べるという形をとっ

ている。高山は、小学校令第1条を引き、小学校教育の目的は基礎教育である点を強調する。その上で「目先の事実にとらわれて、教育を児童の實情・地域の實情のなかに謬着させてしまうもの」を「あやまつた『教育の生活化』」「あやまつた『地域中心主義』」³³であると批判する。高山は「国民生活のための基礎能力の涵養をその目的とし、地域の生活・児童の生活の活用する方法とする」³³_{10P}と述べ、それを「生活教育」と名づける。このような立場に立つ高山から見て綴方中心主義とでもいうような動きは批判すべきものであった。高山は「生活主義の綴方と^{ママ}が、實は生活主義の修身だったのである」³³_{11P}と従来の綴方教育を位置づけ、それは修身教育としては成功しているが、修身教育であるがために修身教育一般が持つ限界性「心構え」「態度」「生き方」といった心的態度を学んだところで現実の生活に転化できないという点を免れないとする。高山のいう「生活教育」とは「綴方だけにあるものでもなく、綴方を中心としてあるのもない」「讀方・算術・地理・理科・家事・裁縫等々の各科目をつらぬいて具體化されるもの」³³_{11P}なのである。

この『生活学校』編集グループの一員である高山の論を、川合章は「これが、おそらく当時の『生活学校』編集部もこれを是とした『生活教育』論であろう」²⁸_{62P}と述べる。また、戸塚自身も後に「この論争で、編集グループはだいたいにおいて留岡氏の意見を支持して発展させ生活綴方人によりきびしい科学的検討を要請する立場に立っている」と述べている⁵_{293P}。ここに至って、雑誌『生活学校』の支持基盤であった綴方教師たちを『生活学校』編集部が批判する、という現象が起きていることが分かる。1935年に池袋児童の村小学校を母体とし、綴方教師たちに多大な影響を与えた野村芳兵衛を中心として生まれた『生活学校』は、1938年に戸塚廉が編集長を任されるようになるが、戸塚もまた綴方教師たちと近い位置にいた。そのような雑誌が綴方教師批判を展開したことは注目しておきたい。もちろん、戸塚は綴方教育の意義を感じ、留岡の当初の綴方教師批判に立腹していた。しかし、戸塚は、教育の生活からの乖離や観念化の批判などの留岡の指摘には共感し、綴方教師たちの自己批判の必要性を感じたのである。また、戸塚は、留岡の視点と、『生活学校』編集部の方向性、そして『生活学校』読者である綴方人たちの視点は、初めより矛盾するものではなかったとする。その上で戸塚ら編集部は、綴方教育の科学的な自己検討・自己批判を求めたのである。

さて、高山の論であるが、生活主義教育を教育全体における原理とし、都市や農村の子どもといった区別をして地域に拘泥するのではなく、国民全体の教育としてとらえるべきであるという意見は傾聴に値する。しかし、高山の綴方教師批判は感情的であると言わざるを得ない。また、川合は高山の論について以下のように批判する。

(略)生活綴方についての、一方的な悪意に満ちたとさえ見れる攻撃と、地域生活と国民生活を故意に分断し、後者を前者に一方的に優先させる乱暴さによって組み立てられている。そこには生活綴方教師に対する、教育の論理以外の、イデオロギー的な反発さえ感じられる。また、権力支配の下におかれている教育の実態を故意に無視する高踏性は、留岡と変わるところがない²⁸_{62P}

このように川合は、高山の論に限界をみる。そしてこの素朴2元論は、結果的に戦争遂行勢力に加担する論理である、と批判する。さらに、この高山の論が『生活学校』最終号

に掲載され、また『生活学校』編集部もそれを是とする論として位置づけられたことに関して、川合は以下のようにそのマイナスの影響に言及する。

この高山の提案で特に注目したいのは、教育の目的は社会から、その方法は地域、子どもからという、素朴な二元論に立ち、両者の統合ないし統一の必要にまったく思いついたらなかった点である。(略) 高山の目的方法素朴二元論が戦後ある種の権威をもつもののようにうけとめられ、さらに教育内容に科学の成果をとという正当な主張と結びつけられたことが、戦後の科学教育理論の成立を大きく妨げたとみることができよう。³⁴

一方で、中内は高山の「単に地域の生活を教材とし、児童の直観的生活を組織しただけでは、国民生活一般のための基礎能力を涵養するといふ目的を十分に達することはできない。普遍的教材を中心として、これを教え、覚えさせるといふ手段も必要であることを否定することはできない。そして普遍的な教材には、それ自身普遍的な生活性があるのである。教材の生活化には、岩礁に附着する牡蠣のように、普遍に特殊を追加することではなく、普遍的な生活性を特殊化する工夫でなければならぬ。」³³_{9-10P} という言説を引き、留岡ら自由教育系統の二元論的な生活主義教育論とは異なる、教材論上の一元論を見る。後期生活主義教育論争はこのように、対立軸が曖昧で一筋縄ではいかないところがある。それは、綴方教師らの側も同様で、北方教師といっても、この論争には積極的には関与しなかった国分一太郎、村山俊太郎ら山形県のグループと佐々木昂や鈴木道太らの考えはこの段階では明確に異なるものとなっている。

ただ、ここで高山の批判の限界性を述べるとするならば、生活綴方を教科として捉え、生活主義教育を綴方だけでなく、各教科に拡大すべきだとした点にある。高山のこの考えは生活綴方を「綴方科」という教科として捉えているが、当時行われていた生活綴方実践は教科のカテゴリーに属するものではなかった。この高山の言説は、一見生活主義教育の拡大といったその成長の理論のように見えるが、その内実は、生活綴方 当時なされていた生活主義教育 を矮小化し、その本質を見えにくくしてしまったという逆説的展開を招いてしまっている。

同号において、この高山の綴方批判に対してその必然性を主張する反論がなされる。波多野完治は「高山氏の提案を讀みて」の中で、高山の理念に賛同を示すが、「教科書の順序をふみながら実践して行かねばならぬ」という教師の制約を考えた時、高山の要求は「あまりに苛酷」³⁰_{15P} なるものであると言う。波多野は「我々は現在の制度の中で出来るだけの事をしなければならぬ」と述べ、「現在の所では綴方を中心にして生活教育を行ひ、その他の教科については出来る範囲で生活教育的な原理の實現を期するというより外ないのではないか」³⁰_{16P} と、綴方を中心とせざるを得ない理由を述べる。ここに波多野が、綴方に消極的必然性あるいは過渡期的必然性ともいべきものを見ていたことが読み取れる。

また、石田三郎は当時の「無氣力と沈滞の教育界」にあつて「常に子供たちに情熱を注ぎ、子供たちと共に苦難に堪え、殉教者のように生きようとしている一團の人々」³⁵ が綴方教師たちであったと述べる。石田は綴方教師たちを「綴方によつて、個々の児童の生活姿態やその情感の中に、自己の若い生命のはげ口を求めて來た教師たち」³⁵_{23P} と呼ぶが、「世

の多くの硬化した教育者の態度に嫌悪を感じ、しかも自らの生活の方向を失っていた青年教師の心が「大きな誇と喜びを感じ、児童との魂の交渉のうちに自己の生活を確認しようとしたのは、まことに無理からぬことであつた」³⁵_{21 P}と、そのことを批判的に見ているわけではない。しかし、石田は子どもの生活と社会生活を峻別し、当時行われていた生活主義教育は「社会生活から隔絶した存在であつた點に於て従來の教育とちがわなかつた」³⁵_{26 P}と批判する。石田にとって、教育の目標や基準は社会生活からのみ求め、設定されるものであつたのである。

以上のような展開をもって、戦前における後期生活主義論争は終息を迎える。

4、生活主義教育論争の史的位罫

前期・後期生活主義教育論争は、大まかにいうとそれぞれ、小川・野村論争、留岡・佐々木論争として捉えることができる。そして、今後繼續して検討すべき余地を残すが、当時におけるマルクス主義思想の多大なる影響が見て取れる。それは、前期生活主義教育論争に先駆けて行われた『綴方生活』誌上の野村と、三重の教師、南砂雄との論争にも表れている。南は、『綴方生活』1931年4月号で、野村を「人道主義的」であり「空想的社會主義的」な「間違いだらけのブルジョア觀念建築である」と批判し、「われわれの科學、唯物辯證法」³⁶としてマルクス主義を掲げる。南は言う。

(略)今日の社會の情勢が如何なるものであるかは多辯する必要はないであらう。一言にしてそれを言へば資本主義第三期でそれはある。ブルジョアジーの崩壊し新興プロレタリアートの歴史のノツクの音をきく時代でそれはある。

古代共產制は奴隸制へ奴隸制は農奴制へ、農奴制は賃労働制へ 資本主義は社會主義へと進まねばならぬ根據は、^マためにすべての哲學も宗教も科學も教育も綴方もかゝる巨大なる上層建築は經濟的基礎の變動につれて、あるひは徐々に、あるひは急速に變革し、そして人間の歴史の大筋は、かゝる變革によつて描かれて行くのである。變革なきところ歴史はない。かゝる變革を以上の如き見地にたつて把握するかぎり、プロレタリアートがかゝる道程を進軍突貫するためその「行動の指導原理」となるものはマルキシズムである。³⁶_{42 P}

このような南のマルクス主義の唯物論的歴史觀は当時の社會を覆っていたのではなかつたか。野村は南に対し、「僕の所論に社會認識的誤りあらば指摘せよ マルクスポーイ？ 南砂雄君に答ふ」と題し、反論する。この論争は6月号で新興教育研究所の中央委員池田種生が野村批判に乗り出し、それに野村が同号で「煙幕を張るものは誰か？ 言葉尻のみをとって生活法を示さず」で答え、南が7月号に「綴方戰術論(一) 綴方問題オン・パレードへ」を掲載し、問題を総括する形で終わる。この論争の詳細は割愛するが、野村がマルクス主義そのものを批判はしないが、南や池田らを「マルクスボーイ」として退けていることがわかる。7月号では南は野村解釈を転換し、以下のように述べる。

野村氏の立場は（中略）^マ早や人道主義的無政府主義の立場ではなく、プロレタリア的でありマルキシズム的である。（中略）然もより科学的立場に於てといふ事も切言されてゐるから、それがプロレタリアの科学、マルキシズムに立場し、「文化の尺度原器」「宇宙の原則」「協力意志」なる言葉は野村氏にとってはマルキシズムの意識的カムフラージュである事が、さうとは言はれてはゐないが、さうだと發展的に断言する事が可能であるやうに考へられる。³⁷

野村の教育思想の変革は、従来「カント倫理学から社会科学へ」と理解されてきた。野村が教育の政治性を自覚し、社会科学へと目を開かされたことは事実であろうが、空想的社会主義を批判し科学的社会主義を謳い、「社会科学」運動の担い手としてマルクス主義を主張する教師たちを「マルクスボーイ」として野村が批判したことは注目に値する。そしてこの系統を、後期生活主義論争にもあてはめることができるのではないだろうか。つまり、野村の流れを佐々木に、南砂雄や前期生活主義教育論争の小川実也の流れを留岡に見ることができる、ということである。「マルクス主義的社会科学は、一九三〇年代以来、スターリン主義的歪曲を受けてきたが、それは独裁権力を擁護する政治主義・教条主義的歪曲と真理探究の単純化（多様な可能性への弾圧を含む）を生んだ」³⁸と村山士郎は述べるが、これは、先に挙げた川合章の留岡、高山に対する批判的解釈にあてはめることができる、と考えられる。1931年の『綴方生活』誌上での論争の際の南砂雄と同様に、留岡や高山がマルクス主義の唯物論的歴史観に当時の社会を当てはめて考え、「資本主義第三期」社会のさらなる発展の果てに望ましい社会主義社会の到来を見ていたとしたら、戦時下における当時の日本にあって、軍事産業の発展に与する論理へとになってしまう。ムラ社会の寄り合い主義を嫌い、合理的・科学的な社会の発展を目指し、人々を啓蒙しようとした進歩的学者や教師らは、こうしたマルクス主義的社会科学が持つ陥穽にはまってしまった。もちろん、『生活学校』顧問で『教育』編集部の留岡や、『生活学校』編集グループの1人であった高山が軍国主義に全面的に賛成し、それに加担しようとしたわけではない。しかし、彼らの提唱する目的と方法の素朴2元論は、川合がいうように「教育界への弾圧の強化、教育のファシズム化の進行の下で、おそらくは主張者たちの意図とはちがっていたであろうが、それを内面から支える役割を結果的になうことになる」²⁸_{64P}という危険な側面を持っていた。

一方で、機械制工業の人間疎外的一面をつかんでいた野村や、北方の生活に密着していた佐々木には、その危険性が見えていた、といえる。佐々木は雑誌『北方教育』に1934年に発表した「リアリズム綴方教育論（二）」の中で言う。

（略）「あるがまゝに描け」といふリアリズムの方法論に於ける「あるがまゝ」とは客観的事実存在そのものではあり得ない。必ずそこには我によつて「観られたありのまゝ」が描かれるに違ひない。

観る者は我である。そして観る我なくして表白が保たれない。こゝに選択があり、主観があり、偏向がある。（中略）そのために指導論としてのリアリズムが重要性を担ふのである。

（略）リアリテがどのやうに我にとつては純粋な自己発現であつたにせよ、それなりで直ちに価値的だといふのではない（この点誤解を受け易い）只それが例へ主観的で

あらうと、偏向であらうと我自身に対して偽はり得ない事実なのである。途上にある
私のこの事実　しかしこのリアリテの発展的展開として或は徐々に或は飛躍的に、
客観性なるものに於て、価値性に於て、普遍的相に於て表はれ得るやうに我にとつ
ては絶ゆることなき精進となり、教育としてはかくまで指導することが必要なのであ
る。³⁹

この佐々木の主体と客体を捉える世界観は、マルクス主義の研究者三木清の影響を受け
ている。佐々木はマルクス主義の理論に立った文学論から哲学的世界を開かされ、それを
綴方理論へと還元していった。しかし、佐々木は「個のリアリテ」を重視する。「個のリア
リテ」とは、客観的対象と主体との相関関係のなかで主体の中に生まれた内面世界あるい
は内的事実である。そして佐々木は、その「個のリアリテ」として捉えられた「生活」を
「言葉」によって綴ることに大きな教育的意義を見出している。また、この時点での佐々木
の教育指導の内実は「認識生活」の指導に限定されていたが、それが、翌年に発表された
「リアリズム綴方教育論（三）」になると、「私たちは、まだへこゝまでの指導をたんねんに
やらなくてはならない。リアリズム綴方の問題にとゞまらず『生き方』自體までの問題をも
含むのである」⁴⁰と、その指導の目標や範囲を生活そのものまで広げていることがわかる。
こうして佐々木の実践は「はみだした」教育へとなっていった。このように佐々木はマル
クス主義に学び、「個々人の『生活』の背後には歴史の発展法則にもとづく共通の真理があ
ることは認めながらも、その真理を一般的に指摘するのではなく、個々人の『生活』のも
つ特殊性の徹底した解明を積み重ねることによってこそ真理に近づこうとした」⁴¹のである。

中内敏夫は「野村芳兵衛は（中略）理論的にはマルクス主義に、実践的にはファシズム
に『破れ』去った。」⁴²と述べる。しかし、曲解されたマルクス主義に踊らされず、子ども
の生活を見つめた野村と佐々木、特に、ファシズムの流れに抵抗しようとし、弾圧され
獄中で無念の死を遂げた佐々木の教育理論は、今改めて評価されるべきものである。

また、後期生活主義論争における主な論点を川合は以下のようにまとめる。

- ・教育の目標・内容と方法を何に依拠して明らかにするか。
- ・「最小限度を保障されざる生活」に照準をあてるのか、国民生活全体を視野に入れるのか。
- ・産業の軍事的再編成に学校教育をどう対応させるのか。
- ・教師の対地域活動をどうみるか。
- ・教科論。
- ・前期生活主義教育と後期生活主義教育の把握をめぐって。²⁸
63-65 P

以上の川合の挙げる論点はそれぞれが密接な関わりを持つものであるが、大枠では現実
社会と学校生活との関わりをどう捉えるかという問題といふことができる。しかし、日本
は1933年に国際連盟を脱退し、1937年には文部省から『国体の本義』が出され、ファシ
ズムへの道を進み始めていた。そのような中で、現実社会をどうとらえ、それをいかに克服
していくかを明言できる立場の者はいなかった。このような歴史的制限があったにも関わ
らず、前期生活主義論争の問題を引き継ぐ形でなされた後期生活主義論争ではさらにレベ

ルの高い議論が行われたと言える。教科教育と現実生活における問題との関わり、さらにいえば教科教育と人間としての生き方との関わりは、特に国語教育において課題となることである。なぜなら、言葉という人間を人間たらしめているものを媒介として考え、表現する国語科は、自分自身そして自己と他者、さらには自己と世界との関わりを問うことへとそのベクトルが向かっていく宿命を持つものだからである。

また、歴史的な位置付けを考えた時に、川口幸宏がこの時期の生活綴方について「生活教育という名で呼び、綴方を生活教育の中心教科に位置づけるカリキュラム改造の意思表示をしている」⁴³と述べているように、この時期における生活主義教育は生活綴方実践を中心にしたものであったと言える。生活主義教育とカリキュラム改造との関わりで言えば、戦後に社会科を中心としたコア・カリキュラムが推進されるが、その際に滑川道夫を初めとする綴方教師がコア・カリキュラムに賛同を示したことも注目すべきことである。生活綴方を中心に据えた生活主義教育カリキュラムと、社会科を中心に据え言語教育を道徳的教科とみなすコア・カリキュラムとの関連については今後の検討課題である。

また、戦前における生活主義論争が起こった1930年代を野地潤家は「わが国初等作文・生活綴り方の興隆期であり充実期であった」と述べ、「1929年ころ、わが国独自の生活綴り方の発生ならびに発展を見るに至り、ほぼ10年間にわたって目ざましい実践的集積が行われた」⁴⁴と評価している。このように小川実也と野村芳兵衛との間で始まった「労働とはなにか」を問題にした前期生活主義教育論争から、全国の綴方教師をも巻きこんでの論争となった『生活教育』および『教育』誌上の後期生活主義教育論争にかけての動きは、国語教育史において生活綴方の発展と共にあった。

前期・後期生活主義教育論争を通して、広義における望ましい学力をどのようにとらえるのか 社会的生産に結びついた教育への主張に対し、学校教育の独自性はいかにあるべきか や、教育課程の改造の必要性への言及、教育の内容・目標と方法とをどう捉えるべきか、などの課題が明らかになった。また、綴方教育の評価も俎上に乗せられた。川合は、前期・後期生活主義教育論争を「野村の生活教育論をめぐる論争という性格をもつといえなくはない」²⁸_{66 P}とも述べる。つまり、浄土真宗への信仰を根底とする野村の教育論の観念的な面の克服という側面を見るのである。また、「野村の教育の目標・内容と方法についての素朴一元論的発想に対する批判」²⁸_{66 P}として、教育の目標・内容と方法を2元的に見るといふ動きを捉える。そこには、先に述べたように戦時下における素朴2元論の持つ危険性の問題もあった。このように前期・後期生活主義教育論争は、時代に翻弄されながらも、野村の生活主義教育理論の持つ問題点を明らかにし、さらに生活綴方教育の意義や問題点を解明しようとした。この論争は、戦前における教師たちの水準の高さを示しており国語教育史のなかでも誇るべきものであろうが、この論争において明らかになった問題点は戦後に引き継がれることになる。

5、おわりに

ここで見てきた1930年代後半になされた2つの生活主義教育論争は、デモクラシーが開いた大正期が過ぎ去り、国家主義・軍国主義に染まりつつある社会情勢のなかで起こ

たものである。戦後に、戦前における国家主義的社会および国家主義的教育を反省し、また批判する時、戦前における民主主義教育実践として高く評価されたのは『生活学校』や『北方教育』を中心とした教育理念であった。コア・カリキュラム連盟機関紙『カリキュラム』1949年8月号では、「座談会・日本の教育運動を回顧する」という特集が生まれ、3つの座談会が行われる。その中で、戦後再刊版の『生活学校』でも編集同人として活躍する宮原誠一は1930年代という時代を「ドイツ観念論の系統の、いわゆる哲學的潮流によつて支配されていた。これが日本の絶対主義的官僚支配の教育のイデオロギーとして利用されておつた」⁴⁵と振り返る。そのような時代にあつて、教育の科学化を求める教育科学研究会と、農村の貧しい生活からスタートした北方教師たちとの討論、交流の場となつた後期生活主義教育論争は大きな意味を持つものであつた。同座談会の中で山田清人は後期生活主義論争に関して、「地方からの一つの生活教育運動というものと、中央における教育科学というものが初めて必然的な交流運動の上において成長した」⁴⁵_{29 P}と評価する。生活主義教育のあらゆる系譜に属する人々が、論を戦わせた後期生活主義教育論争は、戦前における生活主義教育を大きく前進させた。農村の貧困という厳しい生活状況から編まれていった生活緩方実践が残した遺産は、地域社会の関係性の希薄化が進む状況の中で、消費者としてしか社会と関わりを持ち得ない子どもたちといった現代においてはどのように生かせるだろうか、など国語教員として現場に出る者として考えさせられることは多い。歴史を紐解くことの研究的価値を噛みしめながら、今後は舞台を戦後に移して、生活主義教育思想を追っていきたい。

註

- 1 滑川道夫『生活教育の建設』（牧書店 1948年発行）26～28ページ
- 2 国分一太郎、滑川道夫、倉沢栄吉 鼎談“国語教育の動向をさぐる”『国語の教育』（国土社 1968年6月号）15ページ
- 3 西尾実『国語教育学の構想』（筑摩書房 1951年1月発行）
- 4 2009年8月2日にお茶の水女子大学附属中学校で国語教育史学会第45回例会が行われた。その中で田近洵一氏が“戦後・生活主義の教育思想”の題で講演を行った。そこで氏は、先の滑川の言説を引き、目的と方法と実態とが1つになっている滑川的生活主義教育観に共感を示し、その上で、日常生活レベルではなく、生きることそのものが生活であるとし、学校での学習を主体的で必然的な生活として捉えることを提言した。また、田近氏は“言語生活主義教育の再構築 グローバリゼーションと国語教育のアイデンティティー”には、“教育思想としての生活主義は、学習者が生活現実の問題をとらえ、それを解決していく力、すなわち、人間として生活を拓く力を育むことを基軸として教育をすすめようとするものである”（『浜本純逸先生退任記念論文集 国語教育を国際社会へひらく』淡水社 平成20年3月1日発行26ページ）と記している。なお、本研究に多くの示唆を与えてくれたこの論考で、氏は“言語生活主義”という言葉を用いているが、氏の意図するところは“生活主義の言語教育”であることは、講演その他から明白なものである。このような、生活主体として学び手を

捉え、その生活をよりよいものにしていく、といった田近氏の生活主義教育観に、本研究における“生活主義教育”の語は負うものとする。

- 5 生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉 『生活学校 別巻』(日本読書刊行会 1983年初版発行) 38ページ
- 6 編集部 “計画一年” 『生活学校』 創刊号 1935年1月1日発行 12ページ 『生活学校第1巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 7 野村芳兵衛 『野村芳兵衛著作集(8) 私の歩んだ教育の道』(黎明書房 1973年初版発行) 133ページ
- 8 綴方生活復刻委員会編集 責任者 井野川潔 『綴方生活 第10巻』(株式会社けやき書房 1979年発行) 1935年2月号16ページ
- 9 野村芳兵衛 “宗教々育と科学教育” 『生活学校』 1935年2月号 1ページ 『生活学校第1巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 10 野村芳兵衛 “生活学校とは? A君と私の會話(二)” 『生活学校』 1935年4月号 1ページ 『生活学校第1巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 11 座談会 “新秋・読みものを語る” 『教育北日本』 1935年9月号 360ページ 『佐々木昂著作集 全一卷』(著者佐々木昂 編者佐藤広和・伊藤隆司) 無明舎出版 1982年初版発行
- 12 野村芳兵衛ほか “談話室” 『生活学校』 1936年4月号 45ページ 『生活学校第4巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 13 戸塚廉 “編集後記” 『生活学校』 1936年6月号 48ページ 『生活学校第3巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 14 野村芳兵衛 “談話室” 『生活学校』 1936年7月号 48ページ 『生活学校第3巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 15 “新しい出発に當つて” 『生活学校』 1936年10月号 3ページ 『生活学校第3巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 16 戸塚廉 “編集後記” 『生活学校』 1938年5月号 84ページ 『生活学校第8巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 17 高山一郎 “終刊號に寄せる 生きて行く支えをうしなう感じ 獨白ふう” 『生活学校』 1938年8月号 66ページ 『生活学校第8巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 18 黒瀧成至 “『生活学校』に送る” 『生活学校』 1938年8月号 69ページ 『生活学校第8巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 19 城戸幡太郎 “生活学校巡礼” 『教育』 1937年10月号 48ページ
- 20 留岡清男 “酪連と酪農義塾” 『教育』 1937年10月号 60ページ
- 21 留岡清男 “教育に於ける目的と手段との混雑について 生活綴方人の批判に答へる” 『生活学校』 1938年2月号 6ページ 『生活学校 第7巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表・戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 22 坂本磯穂 “生活教育獲得の據點” 『生活学校』 1938年1月号 39ページ 『生活学校 第7巻』(生活学校復刻刊行会監修 代表・戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行

- 23 高橋啓吾 “生活指導の正しい軌道へ” 『生活学校』 1938年1月号 42ページ 『生活学校 第7巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表・戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 24 山田清人 “綴方教育を素直に見直せ 実践論の方向と批評家の態度の問題 ” 『生活学校』 1938年1月号 61ページ 『生活学校 第7巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表・戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 25 中内敏夫 『中内敏夫著作集 学校改造論争の深層』 (藤原書店 1999年初版第1刷発行) 151ページ () は引用者による。
- 26 留岡清男・佐々木昂・滑川道夫ほか “「生活教育」座談會” 『教育』 1938年5月号 71ページ
- 27 中野光 “解説『生活学校』” 『生活学校第13巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行 47ページ
- 28 川合章 『生活教育の理論』 (株式会社民衆社 1981年初版発行) 58ページ
- 29 佐々木昂 “生活・産業・教育” 『生活学校』 1938年6月号 8ページ 『生活学校第8巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 30 波多野完治 “高山氏の提案を讀みて” 『生活学校』 1938年8月号 16ページ 『生活学校第8巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 31 佐々木昂 “生活・産業・教育” 『生活学校』 1938年6月号 13ページ 『生活学校第8巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
 1931年の満州事変以降太平洋戦争までの期間に国策によって、中国大陸の旧満州、内蒙古、華北への入植が推奨された。この時、入植した日本人移民を「満蒙開拓移民」(あるいは「満蒙開拓団」という。農業研修や軍事的な訓練を渡航前に受け、「満州開拓武装移民団」として送り込まれた。佐々木の論考が発表された1938年にも多くの日本人が「満州開拓移民」として渡航しており、佐々木のいう「満蒙大陸^{ママ}えの方向」とはこのことを指しているのではないかと考えられる。
- 32 当時の情勢を示す貴重な資料に羽田澄子演出のドキュメンタリー映画『嗚呼 満蒙開拓団』がある。同名のパンフレット(編集岩波律子 『EQUIE DE CINEMA No.171 嗚呼 満蒙開拓団』自由工房 2009年発行)の中に生き残った体験者の言葉が載る。「国のために満蒙開拓青少年義勇軍に応募したらどうか、と学校で教師たちから言われていた」「あの時期、満州に行くということは、“大義”のひとつだった。行きたくない、と思っても、そう明言することは愛国心が足りない証拠と見なされる怖れがあった。」(8ページ)「全国の村では、映画の上演や講演会を開いて、満州がいかに王道楽土であるかがさかんに宣伝され、村長や役場の職員、学校の先生を総動員して希望者を確保していきました。」(10ページ)といった言葉が続く。このような中で自ら志願してあるいは意に反して、満蒙へと渡った人々は、現地民の報復とソ連軍の攻撃に怯え、飢えや寒さの中、栄養失調や発疹チフスで死んでいき、生き残った者も残留孤児・残留夫人となったのである。この無謀な国策に翻弄された人々への、国による賠償と責任は2007年の「残留孤児」訴訟の敗訴と、その後の国による救済策の提示で決着を見ることとなったが、問題が解決したわけでは全くない。

- 33 高山一郎 “生活教育の再出発のために” 『生活学校』 1938年8月号 7ページ 『生活学校第8巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 34 川合章 『生活教育の100年 学ぶ喜び、生きる力を育てる』 (株式会社眞珠社 2000年初版発行) 82～83ページ
- 35 石田三郎 “生活教育の検討” 『生活学校』 1938年8月号 21ページ 『生活学校第8巻』 (生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉) 日本読書刊行会 1983年初版発行
- 36 南砂雄 “「文化の尺度原器」を疑ふ 「綴方生活」の指導精神?について” 『綴方生活』 1931年4月号 46ページ 『綴方生活 第5巻』 (綴方生活復刻委員会編集 責任者 井野川潔) 株式会社けやき書房 1978年発行
- 37 南砂雄 “綴方的戦術論 (一) 綴方的問題オン・パレードへ” 『綴方生活』 1931年7月号 51ページ 『綴方生活 第5巻』 (綴方生活復刻委員会編集 責任者 井野川潔) 株式会社けやき書房 1978年発行
- 38 村山士郎 『現代の子どもと生活綴方実践』 (新読書社 2007年初版発行) 372ページ
- 39 佐々木昂 “リアリズム綴方教育論 (二)” 『北方教育』 1934年8月号 11～12ページ 『近代日本教育資料叢書 史料篇二 北方教育3』 (解題 鈴木貞雄) 宣文堂書店 1970年復刻発行
- 40 佐々木昂 “リアリズム綴方教育論 (三)” 『北方教育』 1935年5月号 42ページ 『近代日本教育資料叢書 史料篇二 北方教育3』 (大久保利謙・海後宗臣監修 鈴木貞雄解題) 宣文堂書店 1970年復刻発行
- 41 伊藤隆司 “佐々木昂研究 第二章 リアリズム綴方教育論” 『佐々木昂著作集 全一卷』 (著者佐々木昂 編者佐藤広和・伊藤隆司) 無明舎出版 1982年初版発行 312ページ
- 42 中内敏夫 『生活綴方成立研究』 (明治図書出版株式会社 1977年7月再版) 985ページ
- 43 川口幸宏 “生活綴方” 『国語教育指導用語辞典〔第三版〕』 田近洵一・井上尚美編著 (教育出版株式会社 1984年初版発行 2007年第3版第3刷発行) 347ページ
- 44 野地潤家 “昭和の国語教育 (戦前)” 『国語教育指導用語辞典〔第三版〕』 田近洵一・井上尚美編著 (教育出版株式会社 1984年初版発行 2007年第3版第3刷発行) 330ページ
- 45 周郷博・清原道壽・宮原誠一・山田清人 “座談会・日本の教育運動を回顧する その三 嵐の中のエッセンシャリスト” コア・カリキュラム連盟 日本生活教育連盟編 『カリキュラム 第1号 (昭和24年1月1日)～第84号 (昭和30年12月1日)』 全13冊 (株式会社日本図書センター 1981年発行) 『カリキュラム』 1949年8月号 27ページ

【参考文献】

- ・池田進・本山幸彦共編 『大正の教育』 (第1法規出版株式会社 1978年発行)
- ・民間教育史料研究会編 『教育の世紀社の総合的研究』 (株式会社一光社 1994年発行)
- ・生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉 『生活学校』 全13巻 (日本読書刊行会 1983年

初版発行)

- ・生活学校復刻刊行会監修 代表 戸塚廉『生活学校 別巻』(日本読書刊行会 1983年初版発行)
- ・綴方生活復刻委員会編集 責任者 井野川潔『綴方生活 第1巻～第13巻』(株式会社けやき書房 1978年～1979年発行)
- ・中野光『児童の村小学校』(株式会社黎明書房 1980年初版発行)
- ・中野光『学校改革の史的原像』(株式会社啓明書房 2008年初版発行)
- ・日本生活主義連盟編『日本の生活教育50年 子どもたちと向き合いつづけて』(株式会社 学文社 1998年初版発行)
- ・川合章『生活教育の理論』(株式会社民衆社 1981年初版発行)
- ・川合章『生活教育の100年 学ぶ喜び、生きる力を育てる』(株式会社眞珠社 2000年初版発行)
- ・雑誌『教育』(岩波書店 1938年5月号“特輯 生活教育”)
- ・野村芳兵衛『野村芳兵衛著作集(1)～(8)』(黎明書房 1973年～1974年初版発行)
- ・民間教育史料研究会『教育の世紀1』(一光社 1984年発行)
- ・中内敏夫『生活綴方成立研究』(明治図書出版株式会社 1970年初版発行)
- ・中内敏夫『中内敏夫著作集 綴方教師の誕生』(藤原書店 2000年初版第1刷発行)
- ・中内敏夫『中内敏夫著作集 学校改造論争の深層』(藤原書店 1999年初版第1刷発行)
- ・田近洵一・井上尚美編著『国語教育指導用語辞典〔第三版〕』(教育出版株式会社 1984年初版発行 2007年第3版第3刷発行)
- ・著者佐々木昂 編者佐藤広和・伊藤隆司『佐々木昂著作集 全一卷』(無明舎出版 1982年初版発行)
- ・村山士郎『現代の子どもと生活綴方実践』(新読書社 2007年初版発行)
- ・日本作文の会『北方教育の遺産』(百合出版株式会社 1962年初版発行)
- ・大久保利謙・海後宗臣監修『近代日本教育資料叢書 史料篇二 北方教育1～3』(宣文堂書店 1970年復刻発行)
- ・滑川道夫『生活教育の建設』(牧書店 1948年発行)
- ・全国大学国語教育学会編『国語学力論と実践の課題』(明治図書出版株式会社 1983年発行)
- ・全国大学国語教育学会編 代表大槻和夫『国語科教育学研究の成果と展望』(明治図書出版株式会社 2002年初版発行)
- ・記念論文集編集委員会編 代表熊谷芳郎・近藤聡『浜本純逸先生退任記念論文集 国語教育を国際社会へひらく』(株式会社溪水社 2008年発行)
- ・コア・カリキュラム連盟 日本生活教育連盟編『カリキュラム 第1号(1949年1月1日)～第84号(1950年12月1日)』全13冊 (株式会社日本図書センター 1981年発行)
- ・国分一太郎、滑川道夫、倉沢栄吉編『国語の教育』(国土社 1968年5月創刊号)
- ・国分一太郎、滑川道夫、倉沢栄吉編『国語の教育』(国土社 1968年6月号)
- ・編集責任者 勝田守一『岩波講座 教育 第5巻 日本の学校(2) 教科篇(1)』(株式会社岩波書店 1952年第一刷発行)
- ・田近洵一『戦後国語教育問題史〔増補版〕』(株式会社大修館書店 1991年初版発行)

1999年増補版初版発行)

- ・佐藤一子『子どもが育つ地域社会』(東京大学出版会 2002年初版発行)
- ・編集岩波律子『EQUIE DE CINEMA No.171 嗚呼 満蒙開拓団』(自由工房 2009年発行)
- ・民間教育史料研究会『教育科学の誕生』(株式会社大月書店 1997年第1刷発行)